

【報告】

Transitional and Economic Development (TED)

第6回国際カンファレンス参加記

白石 麻保

【キーワード】 中国経済, 中進国の罫, ソフトランディング, 実証研究
【JEL 分類番号】 O53, O10, O20

2015年9月7日、8日の両日、中国上海の復旦大学経済学院で、表記の国際カンファレンスが開催された。これは、復旦大学のCCES (China Center for Economic Studies), JACEM (Japanese Association for Chinese Economy and Management Studies), オックスフォード大学のTMCD (Technology and Management Center for Development) の共催として行われた。

1日目の午前中と2日目の午後は、キーノート・スピーチが行われ、それぞれ国際カンファレンスの主だった研究者らによる報告があった。

1日目午前中のオープニング・セレモニーのキーノート・スピーチでは、低所得、中所得、高所得それぞれのレベルにおける罫の存在と、中国における中所得の罫からの脱却について各国の事例、及び中国に関して理論的な議論が提供され、また中国については実践的な政策提言も出された。イノベーションと関連して、目下のところ自然科学系のジャーナルでのパブリケーションが新興経済国の中で中国が最多であること、R&Dの成長状況などが示されつつ中国におけるイノベーションが起る径路、及びその可能性に関する議論も行われた。この他、人民元レート、中国経済の経済成長パターンについての報告もあった。投資主導といわれる中国経済について異なる推計方法1に基づく分析結果が示され、投資主導と指摘される議論が用

いるデータでは、近年の投資に民間による不動産投資も含まれるのでそれを「消費」と捉えた場合の中国経済の状況など、ユニークな視点が示された。本学会からの参加者では、中国経済学会の中兼前会長、中国経済経営学会の巖会長の報告が1日目午前中に行われた。市場経済化、民営化の方向性、中国経済の過去と現在を踏まえた将来に対する予測と提言といった、中国経済及び中国経済研究に対する体系的な理解と視点が示された。

2日目午後に行われたクロージング・セレモニーのキーノート・スピーチでは、中国の今後の展望について、サービス業の可能性についてそのポテンシャルが観光業の発展による地域経済振興が、政府の介入が往々に見られることによる困難性ととも議論された。この他、中国の真の実力、ポテンシャルを如何に測るかという論点も、統計データの取り方や統計制度の問題とともに議論された。このセッションでは本学会員の参加者から中国経営管理学会の丸川前会長の報告が行われた。鉱業を主要産業とする地域を事例として、報告者による独自調査の結果も紹介しながら失業をテーマに当地の状況を踏まえた議論が展開された。

上述のキーノート・スピーチでは、開発経済学の理論的枠組みからの中国経済の提言、中国の現状認識、将来に対する展望がさまざまな視点から行われた。その際いくつかの興味深い点

が見られたが、そのひとつが海外在住の中国人研究者と中国国内の研究者では、現状認識の点でやや温度差が見られることであった。海外在住の中国人研究者の中国経済の現状認識や展望は比較的ポジティブなもので、例えば「次のステップに向けてどのような方策が有効か」といった議論の展開が海外在住の中国人研究者（日本人研究者も？）によるものが多いとしたら、中国国内の中国人研究者のそれは「このままではいけない、何とかしなければ」というやや悲壮感、焦燥感を帯びた議論が散見された。両者は無論、同じことを別の表現で言い表しているのに過ぎず、中国の次の発展段階へのステップのために克服すべき課題が幾つもあるという点では、おそらくその具体的課題についても認識は一致していると考えられるが、現状認識におけるポジティブ、ネガティブの度合いの相違と、それが国内外在住の中国人研究者によって比較的明確に分かれる点が、それもまた中国の現状、即ち国内における中国経済の現状及び世界における位置づけに関する認識と、世界から見た中国が置かれている位置に対する認識のギャップを表していると考えられ、テーマ選択、議論の進め方それ自体も非常に興味深かった。

1日目午後は3セッションが並行して、2日目午前中は2セッションが並行して設定され、合計して10セッション32報告が行われた。並行セッションであったので、すべての報告を網羅できなかったため、ここでは筆者が参加したセッションを中心に簡単に紹介する。

まず、各セッション・タイトルを列挙しておこう。

- Session I (A): Industrial Upgrading I
- Session I (B): Productivity I
- Session I (C): Firm Behaviors
- Session II (A): Industrial Upgrading II
- Session II (B): Productivity II
- Session II (C): Trade, Financing and Development
- Session III (A): Demography I

Session III (B): Public Policy Evaluation

Session IV (A): Demography II

Session IV (B): Political Economy

並行セッションにおける個別報告では、実証研究の報告が多かった。各種マイクロデータ、地域データを用いてそれぞれのテーマにアプローチするというもので、若手、大学院生の報告も意欲的であった。また、実務家の方の報告もあり、具体的な業種、業界及び企業の紹介と分析が行われていた。

印象的なのは、実証分析における実証モデル設定におけるユニークな点である。例えば家計対面調査をもとにした人々の階層間移動の実証分析を試みたものがあったが、そこでは性別等の変数のほかに、官僚かどうかといった、中国について興味深い変数が選択されていた。また、資金配分の効率性問題に関する実証分析に、政治協商委員が関わることの影響をモデルに盛り込んだ分析も見られた。

TED参加者だけではないが、中国人研究者、特に中国国内の研究者は、自身の実証分析において国内の事情に立脚して課題設定をするか、ないしは理論から導出された実証モデルを設定して分析を行う際にも、上述のように国内の事情をその実証モデルに反映させて検証を行うことがままある。例えば上述のようなファイナンスや企業の効率性問題を考える際に、その実証モデルに「政治協商ダミー」を導入して検証する、といったようなことである。このような点は、国内の経済学者であるがゆえにより深く通曉している事情を如何に分析に反映させるか、という意味で、中国への政策提言のために実践的な分析が可能となろう。

一方、当事者意識が強いために生じる、分析者としての現状認識との間のギャップのようなものが、実証分析においてモデル設定を誤ってしまう、ということがあるかもしれない。上述の例で言うならば、「官僚」という変数や「政治協商ダミー」が持つ実証モデルにおける意味づけを、他の国や制度との比較の中で相対的・

客観的に行う必要がある。そしてこのような実証モデルの客観的意味づけという点は、我々非中国系の研究者もその議論に参加可能であり、そうした研究の improve に大きく貢献できよう。

中国経済の将来展望、そしてその実証分析、という言葉は簡単だが、抱える課題は無数にあり、さまざまなアプローチが必要、そして可能である。そしてその取り組みには多大な労力を要する。冒頭で述べたように現状認識にはそれぞれの立場で相違が見られるものの、それらは同じものを別の言葉で言い換えたものとも言える。即ち我々（中国国内外の中国経済研究者）はその問題意識において多くの共通項を持って

いる。目指される水準は異なるとしても中国経済の発展の持続可能性は少なくとも実践的に重要な課題である。そのような課題探求のために日中間、及び更に広範な研究者で連携し、有効なディスカッションを含むポジティブな「競争」による研究の improve を進めていくことは、中国経済研究だけではなく、関連する研究分野の発展に対する有効性は決して小さくない。そしてまた、忌憚のない意見交換も辞さない日中間の研究交流は、今まで以上に意義深い成果を生み出す可能性をもつであろう。以上が TED に参加した筆者の雑感である。

(しらいし まほ・北九州市立大学)